『詩は友人を数える方法』
長田弘 講談社／講談社文芸文庫

本　　館	請求記号：X/908/Ko19/Osa	資料ID：700475932
神田分館	請求記号：	資料ID：

国際コミュニケーション学部教授　宮本 文

学生時代、家に篭り本を読め、名画座に行け、バックパックで旅に出ろ―という神託が聞こえ、そこつ者の私は不調法にそれに倣おうとしていた（実際にはお金がないので散歩ばかりしていたが…）。それを地で行く『オデュッセイア』好きの友人が「今度の旅は移動がテーマだ」と言って長旅に出た時に、私は移動そのものに特権的な意味を読み込むことが許された気がした。歩く、自転車に乗る、公共交通で移動する、ハンドルを握る、各手段の速度や選択可能なルートや匿名性の有り様の中で与えられる経験の豊かさとその喜びが、その後たびたび啓示となり私の眼前に世界を拓いてくれるようになった。

本書は詩人長田弘さんが一人でハンドルを握りアメリカの小さな町から町へとのべ3万マイル（ほぼ5万キロ）ほど往還した観察記録ともいえるエッセイだ。観察といったのは、この旅がジャック・ケルアックの小説『路上』のようなロード・ナラティブの伝統とは一線を画すからだ。長田さんは匿名性を身にまとい、埋もれるはずだったスモールタウンの人々の暮らしを、土地に根を張る詩の声と並べ記し、静かに別の町に移動する。その頃には、再び戻ることはないであろう町の声が、確かに「友人のように」自分の生に静かに寄り添い続けていることに気づく。また、新型コロナ流行以前より物理的・経済的に移動が困難な時代に、読書が旅の比喩だと教えてくれるのも本書の魅力である。